

## 西周と教育心理学の関係性

法政大学社会学部兼任講師 安齊 順子

### 1. 問題の所在

#### (1) 西周（にし・あまね）と翻訳「心理学」

西周の翻訳の経緯は、心理学史上の謎である。日本ではじめての、「心理学」の訳業は西周によって行われたことは、よく知られている。しかし、西周は、幕末明治の蘭学、洋学者であるが、どのような経緯で翻訳されたのかは、明らかになっていない。今回はこの問題をめぐって、筆者が調べたことをもとに、西周と心理学の関係性を述べてみたい。

「日記の不在の問題」について、まず述べる。西周の日記は、国会図書館に現在は保管されているが、文章が当時の崩し文字であり、歴史的文書の読解ができなければ、読み解けない。また、西が「心理学」の翻訳を依頼されたとされる頃の時期の日記は保管されていないことが判明した。そこで、依頼した人物は誰なのか不明である。また、訳に関して西本人がどのように考えていたのか不明である。渡部(2005)によれば、西周の日記は「日記断片」として、慶応三年から、明治三年十一月十五日まで、明治十四年三月十七日から明治十四年三月二十九日まで保存されている。また、「日記帳」として、明治十五年以後が保存されている。心理学史の論文などで、明治四年ごろ「心理学」の訳を依頼された、とあるが、その時期の日記は現時点では保存されていない、また、翻刻されていないようである。西の日記の翻刻はあまね会、川崎勝らによって行われているが、明治二十年以後が中心である。また、現在伝わっている西周の「自伝草稿」は、徳川時代の終わりの戦乱までは記載されているが、それ以後がなく、「心理学」翻訳のあたりの記載はない。

このようなことから今回は、西の思想的背景について、文献調査をし、また、国会図書館デジタルコレクションで現在確認できる「心理学」の訳書本体を利用し、持論を述べてみたい。

西に関する先行研究としては「西周の思想における心理学」(松野、1985)、『奚般氏心理学』の研究(1) (児玉、1982)、「心理学」という学名の起源—メンタル・フィロソフィーかサイコロジ—(西川、1998)、「西周の訳語の定着—『哲学字彙』から明治中期の英和辞書と中後期の国語辞書へ」(手島、2002)などがある。菅原光(2009)の著書によれば、西周に関する先

行研究は膨大であり、すべてを網羅することはできないため、今回は心理学に関連する文献に限定してあつた。

以下、従来の心理学史での西周の扱いについて触れる。心理学史の立場から西周に触れているのは、佐藤(2005)「西周における「psychology」と「心理学」の間」(『西周と日本の近代』島根県立大学西周研究会編、ペリかん社)と、佐藤(2002)「日本における心理学の受容と展開」北大路書房、がある。

前者では、留学中の西の記録『茶面帳』を中心に、オランダでの西の学びを中心に検討している。実験心理学との関連に触れ、心理学理論発展の時代と西の関係を考察している。また、後者は、留学での西の学びから、西が「心理学」を翻訳したとしており、学制や教育心理学との関係については、触れていない。

#### (2) 教育心理学と翻訳「心理学」——明治初期の心理学、教育心理学

日本の教育学の領域では、高嶺秀夫、伊沢修二がアメリカに派遣され、帰国後(1878、明治十一年)に東京師範学校においてペスタロッチ主義教育を展開した。高峰が翻訳紹介した、ジョホノットの教育学には「心理学」を重視する旨が記されており、高嶺は東京師範学校において「心理学」を独立した科目として扱っていた(安齊、2008)。

教育心理学と似た名称の古い本としては有賀長雄著『教育適用心理学』(1885、明治十八年)があり、教育心理学を冠するはじめての書は塚原政次『教育心理学』(1889)だといわれている。さかのぼれば、1875-76(明治八-九)年にかけて文部省から出版された翻訳書『奚般(ヘブン)氏心理学』が、教育のための心理学としての翻訳であったと理解されている(鈴木祐、2007)。これが今回問題にしている「心理学」である。

明治五年に学制が敷かれ、東京師範学校では1877(明治十)年に中学師範学科に「心理学」が教科として加えられ、ウェイランドの原著が用いられた。1879(明治十二)年には『奚般(ヘブン)氏心理学』が教科書として使用された(鈴木祐、2007)。この時期は原著と翻訳が両方使われていた、と伝えられている。

『奚般(ヘブン)氏心理学』の訳者は西周であり、幕末明治期に活躍した翻訳家、思想家である。西周に

翻訳を依頼した人物は不明であるが、西は「心理学」の翻訳のあとは、兵部省に仕事の拠点を移し、軍事関係の翻訳に従事するため、心理学だけをその後教えていたわけではない。その意味では、西周については、『心理学』の訳者ではあるが、心理学者であるとは言えない、という評価が一般的である。

## 2. 西周の人生について

### (1) 西周の思想的背景、翻訳前後の事情

西は、明六社が出来た時の 10 人の創設メンバーである。これが、西が明治啓蒙期の思想的啓蒙を可能にした背景である。このメンバーは会合し、論文を発表した場合は相互に読んでいたのであるから、彼ら同士はお互いの思想や、翻訳能力などを熟知していたと考えられる。西が明六社のメンバーとなった理由は、江戸末期にオランダ留学していたこと、幕府の開成所教授職をしていたこと、明治維新前より翻訳の仕事をしていたということが理由としてあげられるだろう。

まず、「心理学」については、西村茂樹より、翻訳を依頼されたという説がある。西村茂樹は、佐倉の支藩佐野藩士の息子であり、明治維新前にも佐野藩の仕事についていた。また西周よりも年上である。そのようなことから、翻訳を依頼するということもありうることであり考えられる。濱下（2005）によれば、西村茂樹は、明治以後、文部省編書課長であったので、学術書の翻訳にあっていたが、西周は、蘭、英、仏の諸国語に通じ、又漢学の素養があったため、翻訳を依頼したという趣旨の発言をしているとのことである。

次に時期であるが、明治四年ごろに翻訳は依頼されたと仮定されている。この時期は明治五年八月に「学制」が公布されたことが大きな事件であると言えよう。一般的には現在の視点から見て「心理学」は、教育心理学のルーツとして認識されており、師範学校等で教師を育成するにあたり、心理学の教科書として翻訳された、と理解されている。明治四年ごろに教育の改革に取り組んだ人物は多く、「学制」に関わっている人々でもあった。

明治四年十二月、「学制取調掛」は任命された。学制散調掛については、後述する。

西はペリー来航の年には数え年 25 歳であり、日本の幕末の激動時代を生き抜いてきた人物である。新しい明治の世を作るため、啓蒙思想の論文を多く書き、翻訳をたくさん行った。それは蘭学者、洋学者として当然のことであり、現代のように学問が細分化し、心理学者が心理学の本を書く、という時代ではなかったのであるから、ある意味当時においては当然のことであったようである。

西周は「非学者職分論」の中で、江戸時代の読書人は風変わりであり、政治にかかわることはなかった。明治になり、書生から官途を目指すことが可能となった。これは学問と知識人と政治との関連を述べたと考えられている。

今回の文献調査の中で、高坂（2005）によれば、西はオランダへいく途中の船の中で書いた手紙にデカルト・ロック・ヘーゲル・カント等を学びたいと述べていた。当時の日本で、翻訳業にあっていた西にとって、西洋の法や西洋事情を学ぶこと自体が目的であったことは当然のこととして、儒学を学んでいた西としては、哲学的な思想、形而上学を学ぶことを留学の目的としていた、と考えられる。このような指向をもつ西であるから、依頼された可能性もあるが、『心理学』については、翻訳をするにあたり本人の意思も働いていた、と筆者は考えている。日記がみつからない以上、推論の域を出ないが、従来言われてきたように「翻訳を依頼されたから」という受け身な理由で訳したのではないと理解できる。

### (2) 西周の人生とそこでの翻訳の時期

以下は松島（2005）高坂（2005）を参考にし、西周の人生の前半を記述する。

西周は、文政十二年（1829）に石見国津和野森村、父は藩の御典医の家に生まれた。四歳のころより祖父から『孝経』を学び、六歳のころから『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書を学んだ。十二歳で津和野藩校養老館へ入学した（1840）。医師になることを志していたが、20歳のとき、一代還俗し、儒学を学ぶことを命じられた。その時期に母親が亡くなる。「狼狽恍惚、茫然として手を下す処無き」状態となった。津和野藩の官学は朱子学であった。18歳ごろ、荻生徂徠の学問を読み、影響を受けた。20歳になった七月には、養老館句読（助手）となった。21歳の秋から3年間、大阪で遊学した。嘉永六年（1854）、25歳の年の六月、ペリーが浦賀に来航した。藩主の命令で藩から数人が江戸に派遣され、西周も江戸に向かった。この年の冬よりオランダ文典を学びはじめた（野村春岱につく）。西周は洋学を学びたいと考え、脱藩を願い出たが、「永の暇」を与えられた。当時西洋について知り、日本を救わねばならないという気持ちは多くの知識人が持つものであり、松島弘によれば、藩主は「哀憐」に思い目こぼしをしたのではないかとしている。

脱藩後、西は手塚律蔵の又新堂（ゆうしんどう）で英語を学んだ。手塚律蔵も周防国を脱藩し、長崎の高島秋帆のもとで蘭学、兵学を学んだ人であった。佐倉藩につかえていたが、蕃書調所が開設されたとき（1856）に、教授手伝いとなった。

西は脱藩後オランダに留学するまで 10 年間、オランダ語と英語を学んだ。

西は箕作阮甫の『和蘭文典』で学んだ。一般に「ガランマチカ」と呼ばれ、緒方洪庵塾でのオランダ語の入門書と同じである。その後中浜万次郎について英語を学んだ。幕府は当時アメリカ公使ハリスとの交渉を行っており、西周は手塚律蔵、森山多吉郎とともに、アメリカ使節和解（翻訳）御用を担当した。文久元年（1861）幕府がハリス宛に洋式軍艦二隻を発注し、同時に人員の派遣が決定された。この一行に西周は、榎本釜次郎、津田真一郎らとともに選ばれた。アメリカは南北戦争であったので、急遽交渉はオランダに変えられ、16 名がオランダに派遣された。

西周らの船は、文久二（1862）年六月品川を出帆し、文久三（1863）年四月オランダ本土に入港した。船の中で「関係者各位」あてに書いた手紙には、「統計学、法律学、経済学、政治学、および外交の学」が日本では知られていない、留学によってそれを学びたい、とある。帰国は慶応元年（1867）十二月であった。

佐藤（2005）によると、留学中の記録は『茶帳面』に記されていた。西の訳語については、慶応二、三年ごろ発表された『百一新論』では、ルビ無しの「性理学」とピシコロジーとルビのふられた「性理学」がある。明治六年の『生性発蘊』では性理の学は英語「サイコロジ」、大要相似たるを以て直に性理と訳す。また、明治八年の「心理学」ではサイコロジー訳して性理学。西の訳では **psychology** はずっと性理学があてられていたことになる。

その後の西周の人生であるが、試みに、西周の事典解説を見てみると、「哲学者・啓蒙学者。津和野藩医の子。通称経太郎・周助。甘霖斎・天根と号す。はじめ儒学を、のち蘭学・英語を学び、王政復古に際しては徳川慶喜に近侍したが、維新後山県有朋のもとで新政府軍部官僚となる。一方、明六社に加盟し啓蒙活動にも尽力、『明六雑誌』に哲学論文を発表した。哲学・心理学の術語を創り日本近代哲学の父といわれる。貴族院議員。明治三十年（1897）没、69 才。」（美術人名辞典）

この事典の記述の中では、「維新後山県有朋のもとで」のころ、つまり維新後、山県のもとへ行く前か、山県のところで働いていたところに「心理学」の翻訳をしたことになる。

菅原光によれば、江戸時代末期の津和野藩において朱子学や徂徠学を学んだ。菅原によれば西は<啓蒙的>文章を書いた、として理解され、政治評論的な文章を書いていないため、政治思想史研究の対象としては重視されてこなかった、という。西の評価は長い間「日本における哲学の父」とされてきた。

留学は津田真道とともにいっており、津田の辞典解説によれば「1857 年蕃書調所（ばんしょしらべしょ）教授手伝並となり、同僚の西周（にしあまね）と親交を結ぶ。1862 年（文久二）西らとともにオランダに留学、フィセリング Simon Vissering（1818—1888）教授について国法学を学ぶ。1865 年（慶応元）帰朝。翌 1866 年西周とともに開成所教授職となり、（後略）」（日本大百科全書、津田真道より）1866 年、オランダからの帰国後、西は「万国公法」の翻訳に従事した。西周の記した「自伝草稿」によれば、政事学、性法（自然法）学、万国公法学、国法学、経済学、政表（統計）学、をフィセリングから学んだ、という。

これらの辞典の解説によれば、つまり、西周は、若いころに蘭学、英語を学び、津田真道とともに 1862 年から 1865 年、オランダに留学した。その後、幕末は徳川慶喜に仕えていたが、明治維新後、新政府に呼び出され（明治三年）、翻訳などの活動をし、その後山県有朋に仕えた。その傍ら、明六社の活動をしたことになる。新政府に呼び出され、翻訳などの活動をし、という時期に「心理学」を訳したことになる。

森鷗外「西周伝」（明治三十一）では、明治三年、沼津兵学校時代にしきりに学政について聞かれ、二月に「文武学校基本並規則書」を草した。その体裁は、初等教育からはじまり、「文は国文学、外国文学、政治法律歴史道徳医薬の諸科に至り、武は歩騎砲工の諸科に至る。」（p104.鷗外歴史文学集第 1 巻）

以下、現代語訳していくと、九月二十日、太政官書記官から静岡藩を通じ、西周助、津田真一郎に御用がある、至急上京せよと命が下った。二十一日、西周は藩命で沼津を発した。

二十八日兵部省出仕少丞准席を命じられ、学制取調御用掛を兼ね。となり、このとき、学制取調御用掛を兼任したことがわかった。二十九日兵部省に至る。翻訳局の事を視る。

以上のような事情で、西周が沼津から上京し、兵部省に出仕したときに、「学制取調御用掛」を兼任したことがわかった。

学制取調御用掛は、明治五年の学制を制定する前に、制度を検討したメンバーによる合議体である。このメンバーに西が加わっていたとすれば、現代の教育心理学と思われる「心理学」の必要性を感じ、翻訳したということも考えられる。学制取調御用掛は、12 名であると言われているが、それは、箕作麟祥、岩佐 純、内田正雄、長 燃、瓜生 寅、木村正治、杉山 孝敏、辻新次、長谷川 泰、西潟 納、織田 尚種、河津 祐之の 12 名である。つまり、西周は含まれていない。

森鷗外の「西周伝」については、様々な研究がなされている（村上、2010 など）が、翻訳時期の日記がみ

つかっていない以上、この時期の西については、「西周伝」を信じるしかない。学制取調御用掛を兼ね。という記述からは詳しいことはわからないが、歴史上記録されている 12 名の誰かに何らかのアドバイスをした可能性もある。『心理学』の翻訳には、西村の意向か、この学制の仕事との関連の可能性が指摘できるだろう。現時点では、西と学制との関係は「西周伝」しか見当たらず、詳しい内容検討は今後に期待される。

菅原（2005）によれば、西は、陸軍省に出仕する役人であり、「軍人勅諭」草案の起草者であったことを、どう評価するかが難しく、それにより政治思想史としての検討はなされず、国語学など（翻訳家としての）の研究対象者とされることが多い、という。また、菅原（2009）によれば、従来は丸山真男の説の影響で、荻生徂徠の影響を受けた西周、として論じられることが多かった、という。今後はこのような従来の説に引きずられることなく、西と荻生徂徠について論じていくべきだとされているが、本論文は西と『心理学』について述べているので、荻生徂徠との関係については触れない。しかし、ライデン留学以前の西の学んだものと、留学以後の西との関連性は、今後も検討していくべき問題だと考える。

植手（1984）『日本の名著 34 西周・加藤弘之』の年譜によれば、1881 年（明治十四）年、西が 53 歳のとき、六月に東京師範学校長を嘱託されている。この点は長く見過ごされてきたのであるが、西が東京師範学校長としてどのようなことをしたか、今後の解明が期待される。ただし西は 1885 年（明治十八年）に脳疾患により人事不省となり、翌年一月には文部省等を退任している。仮に活動していたとしても、晩年の短い期間であった。

### (3) 西訳「心理学」より

訳文からは、アメリカ国ジョセフヘーブン氏によること。サイコロジー（カタカナ）に性理学、が充てられている。p3 には、生徒の理解が早くなる、という趣旨の文章が見られる。

「観念、实在、主観、客観、帰納、演繹、総合、分解」などは新しい訳語を作った、としている。はじめてこの学問に従事する者にはこの書が適している、と訳者識、に記載している。

13、14 コマ（国会図書館デジタルコレクション）では、心理学といえ、心意運用の事実を、相互に相関する理法を考定するものなり、としている。

32 コマでは、シンティレスアナリシスを総合分解、アブストレククトを抽象とした。ノーションを概念、カウズを因縁、ライトを正直とした。

### (4) 西と哲学

桑木（2008）は、明治七年、西周著『百一新論』において、はじめて哲学という言葉が使われたのであるから、西は日本哲学の祖である、という。佐藤（2005）の論証のように、この時期は新心理学、精神物理学的測定法、がまだ西には知られておらず、内容的には哲学にかなり近い心理学を西は紹介したのであった。つまり、哲学の祖、ということは同時に心理学の祖ということになる。西は心理学には実験が必要ということを知りながら、自分はその実験をしていないので、という但書つきで、心理学を紹介していた。西の訳語は「哲学」「論理学」「倫理学」「美学」なども含まれており、心理学だけではなく、抽象的な概念や学問の訳語を多く手掛けていた。鈴木登（2005）による西周の「統一科学」の理解によれば、心理学は、行門実践論、つまり応用の側におかれ、感性、感覚の世界、「美、信、情、教」の世界に分類される。西にとっての究理の学は、「論理学」に分類されていた。

### (5) 西と「人世三宝説」

西は明治七年、「明六雑誌」に J・S・ミルを下敷きにした、「人世三宝説」を投稿した。これは、第一の規則「いやしくも他人の健康を害することなかれ。しかして助けて以て進達すべくばこれを進達せよ」

第二の規則「いやしくも他人の知識を害することなかれ。しかして助けて以て進達すべくば進達せよ」

第三の規則「いやしくも他人の富有を害することなかれ。しかして助けて以て進達すべくばこれを進達せよ」という社会道徳を説いた。

これは少なくとも他者の健康などの権利を犯すことなく、また、他の人の健康などの増進を手伝うべきだという内容であり、当時西が紹介していた J・S・ミルという思想家の社会における究極の幸福は、国民全員の福祉だという思想に基づいている、と言われている。

発表された時期は「心理学」を翻訳していたいた時期と重なる。西の時期の心理学は、いま現在の教育心理学とは異なり、現実の子供の教育に関する研究などではないが、西が当時、「人世三宝説」にあるような社会道徳を啓蒙思想として説いていたことは記されてよいだろう。

## 3. 『心理学』翻訳刊行後の日本の心理学

前述したが、教育心理学の歴史では、1875-76（明治八-九）年にかけて文部省から出版された訳書『奚般（ヘブン）氏心理学』が、教育のための心理学としての最初の訳書であったと理解されている（鈴木祐、2007）。明治五年に学制が敷かれ、東京師範学校では

1877（明治十）年に中学師範学科に「心理学」が教科書として加えられ、ウェイランドの原著が用いられた。1879（明治十二）年には『奚般（ヘブン）氏心理学』が教科書として使用された（鈴木祐、2007）。ただし、この理解は、第二次大戦後の「教育心理学」という存在や科目がすでにあり、現在の大学教育を受けた心理学者としての、筆者がみる見かたである。西が活躍した時代、現在の東京大学も存在しない時期に、『心理学』に期待されたものはなんだったのか。西にとっては、留学で学んだ形而上学を示すための方法であったかもしれない。学制は発布されたが、予算の問題などで、その時期は江戸時代の寺子屋の名前を付け替えただけの学校が存在し、就学率の向上にはかなり時間がかかったことは教育学史上、有名な事実である。西は多くの国民が、子供が等しく教育を受けることができる社会を想像してはいたが、現実には容易に達成されないことを知っている立場にあった。

教育心理学と似た名称の古い本としては有賀長雄著『教育適用心理学』（1885、明治十八）があり、教育心理学を冠するはじめての書は塚原政次『教育心理学』（1889、明治二十二）だといわれている。西の「心理学」の訳本の発刊後、『教育適用心理学』が刊行されるまでの間に、西の訳をダイジェストした形の教科書が作られたという説もあるが、これまでこの時期の心理学の本については、細かい調査はまだ行われておらず、詳しいことは不明である。

師範学校を中心に学校の教師を作っていく過程で、『奚般（ヘブン）氏心理学』そのものが入手できないか、内容が難しいため、海賊版が作られたという説があるが、これについては師範学校の歴史資料などを調べるしかなく、今後の調査に期待するしかない。

高等師範学校では、1900（明治三十三年）年以後、研究科に「児童研究」や「実験心理学」の科目名がみられるようになった。

1906（明治三十九）年、松本亦太郎が京都帝国大学の心理学講座の教授として就任し、ドイツ等から輸入した実験機器を東京高等師範学校から持参し、心理学実験演習を開講し、実験研究の指導にあたった。松本が留学中に購入した機器は、本来は東京高等師範学校のために購入し、教育のための心理学的研究に使われるはずのものであった（安齊、2008）。そのことから見ても、松本の実験心理学は本来、教育と深いかわりを持っているはずである。実験を中心とした「教育心理学」は、松本の帰国以後、日本で教育や研究がなされていった、と考えられる。

西の翻訳から、松本らのドイツ留学後の心理学まで、30年程度間があり、この時期の「心理学」については、謎が多く含まれている。元良勇次郎の帰国と講義の始

まり、その弟子の活動などが解明されているが、それらの心理学研究が現在からみてどのような部分が教育心理学的活動だとみなされるのか、師範学校ではどのような活動、また心理学研究がなされていたのだろうか。松本時代を実験心理学の時代とすれば、オランダ留学後に西が翻訳した『心理学』と、ドイツ留学後の松本の「実験心理学」との間の時期に、どのような「教育心理学」が存在し、どのように受容されていったか、は、今後の研究課題となる。

## さいごに

明治十五年に書かれた「尚白答記」では、西は「まず百科の学術において統一の観を立て、各自にその精微の極にいたることより始まるなり。これ学者分上の事業なり。それ以上は作業者の事業にて、学者の事にはあらず。」として、学者としては統一的な理論を追求することが必要だとした。そのような理由から晩年も哲学を極めようとした、と考えられる。しかし、実験等、形而上学でないこと、また社会における現実の困難の解決等は学者の仕事ではないとした。西にとっては、学者のすべきことが厳密に規定されていた。西にとっては、「心理学」の翻訳のように西洋で学んだ学問とその精緻な紹介、移入が学者の仕事と捉えられていたと考えられる。また、明治維新後も主に翻訳や文章を書き、「明六雑誌」に発表する活動などの文筆活動を中心にしており、明六社で同じ時期に活動した加藤弘之のように東京大学の総長になるなどの政治的な活動はしなかったようである。西は「学者として」なすべきこととして、あくまでも「百科の学術において統一の観を立て」ることを目的としており、「百一新論」などに認められるように学問の系統的理解、統一的理解を晩年もすすめていた。それが現在の世からは「哲学」であるように見え、哲学の父としての西周の評価がされていったのではないかと、筆者は考える。

## 引用文献

- 安齊順子 2008 日本の教育心理学 服部環編『使える教育心理学』北樹出版
- 濱下昌宏 2005「西周における西洋美学受容—その成果と限界」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 井上厚史 2005 「西周と儒教思想—「理」の解釈をめぐる」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 児玉齊二 1982 『奚般氏心理学』の研究（1）『日本大学人文科学研究研究所研究紀要』26、97-115p

- 桑木巖翼 2008 『日本哲学の黎明期：西周の『百一新論』と明治の哲学界』書肆心水
- 松野安男 1985 「西周の思想における心理学」東洋大学文学部紀要 教育学科・教職課程編 (11), p1-15.
- 松島 弘 2005 「西周と津和野」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 森鷗外 1898 (明治 31) 「西周伝」『鷗外歴史文学集』第 1 卷 (1999) 岩波書店
- 村上祐紀 2010 「森鷗外『西周伝』論」小山工業高等専門学校研究紀要 第 42 号, 183-192.
- 西川泰夫 1998 「「心理学」という学名の起源—メンタル・フィロソフィーかサイコロジーか」科学基礎論研究, 26 (1) p17-22.
- 佐藤達哉 2005 「西周における「psychology」と「心理学」の間」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 佐藤達哉 2002 「日本における心理学の受容と展開」北大路書房
- 菅原光 2005 「平常社会論」としての軍人論 島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 菅原光 2009 『西周の政治思想：規律、功利、信』ペリかん社
- 鈴木祐子 2007 日本の心理学「明治」大山正監修『あたりまえの心理学』文化書房博文社
- 鈴木登 2005 「西周哲学の認知体系と統一科学—総合化への構図を求めて—」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 高坂史朗 2005 「新しい世界を求めて—西周とオランダとの出会い」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社
- 手島邦夫 2002 「西周の訳語の定着—『哲学字彙』から明治中期の英和辞書と中後期の国語辞書へ」『文芸研究』154
- 植手通有 1984 『日本の名著 34 西周・加藤弘之』中央公論社
- 渡部望 2005 「西周の日常—「西周日記」から—」島根県立大学西周研究会編集『西周と日本の近代』ペリかん社

## 謝辞

本論作成にあたり、「洋学史学会」の皆様には、蘭学についてご助言をいただきました。また、政治思想史について、首都大学東京の河野有理先生は、筆者の質問に答え、ご助言いただきました。森鷗外研究者の林正子先生には、「西周伝」についての論文を教えていただきました。記して感謝いたします。